

裏垢女子、



痴漢に遭う。

体験版

あさひかわ ひな

旭川 陽菜(16)

名門私立中高一貫女子校に通う
真面目な女子高生。

厳しい家庭に育ったストレスからSNSで裏垢を始めてしまう。
Gカップある胸がコンプレックス。

アカウント名

→ ひな

アカウントID

→ @hina_h





ひな @hina_h

...

アカウント作りました！エッチなことが大好きな

16歳処女です♡よかったらよろしくね^^



4



6



28



チンチンオジサン @chin2

...

返信先: @hina_hさん

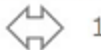
ひなちゃんはじめまして^^フォローさせてもらっ

たよ。よろしくね。さっそくだけど、おっぱいの

サイズはいくつなのかな？



1



1



3



ひな @hina_h

...

返信先: @chin2さん

Gカップだよ。コンプレックスなの;;



1



8



19



チンチンオジサン @chin2

...

返信先: @hina_hさん

コンプレックスなんて勿体ない。そんな素敵な身

体に生んでくれたお母さんに感謝しないとね。よ

かったらおっぱい見せてくれるかな？



1



3



9



ひな @hina_h

...

返信先: @chin2さん

えっと、恥ずかしいけど、胸載せるね。変なとこ

ろないかな;;





ひな

@hina_h

...

いっぱい返信来てびっくりしちゃった汗。みんなのDMに送るのはちょっと大変だから、ここに載せちゃうね。恥ずかしいから、30分後には消します。



17

38

★ 59



以下大量の返信につき省略



ひな

@hina_h

...

みんないっぱい返信くれたのに消しちゃってごめんね>< スクショはしたから、みんなのエッチな返信でオナニーしちゃおっかな。

7

3

★ 23



ひな

@hina_h

...

オナニーすごく気持ちよかった♡今日は寝るね。おやすみなさい！

28

5

★ 34



日常投稿につき省略



ひな

@hina_h

...

処女ってめんどくさくないかな？おまんこちゃんと準備するから、おちんぼじゅぼじゅぼしてほしいなあ

12

27

★ 39



オッパイオジサン

@paipaichuchu

...

返信先: @hina_hさん

僕は処女大好きだなあ。ひなちゃんにはずっと処女でいてほしいかも (笑)

1



ひな
陽菜は16歳になったばかりの高校生である。それなりに良い家に生まれ、中学からは私立の女子校に通っている。両親は己にも他人にも厳しいタイプで陽菜にいくつも習い事をさせて塾に通わせているが、仕事で忙しく家にはあまりいない。

そんな中で陽菜にストレスが溜まるのは当然のことで、陽菜のその解消は性的な方向に向かった。

とは言え箱入り娘で女子校育ちの陽菜が彼氏を作ったりセフレを作ったりするのは無理な話で、やれることと言えばオナニーだけだった。その内所謂「裏垢」というものの存在を知った陽菜は、躊躇しながらも、好奇心と性欲は止められずそれを作った。

こんなことをしてはいるが、陽菜はかわいらしい女の子である。いい家で生まれ育っているので奥ゆかしい女の子で、ついでに言う背は平均的だが出るところ出て締まる所は締まったいい身体だ。16歳でこれなので、将来が楽しみである。

そんな女の子が、裏垢なんてものを作ってしまって、飢えた男どもの餌食にならないはずもなく。

陽菜はまだあずかり知らぬところだが、裏垢で投稿してしまった動画には、制服がちらりと映っていた。陽菜を狙うハイエナ達がそこから陽菜を特定するのは、そう難しいことではない。「っ……」

通学中痴漢されることは、陽菜にとっては日常だ。毎日地下鉄で乗り換えありで 30 分かけて通っているのだが、朝も帰りも通勤退勤ラッシュと重なっているし、陽菜の着ている制服はこの辺ではそこそこ有名な学校なので、痴漢の標的になりやすいのだ。だから陽菜は痴漢にはもう慣れているし、あまり気にしないことにしていた。

裏垢では「痴漢して」とかいろいろ言っているが、それは陽菜にとってフィクションのようなもので、実際にしてほしいわけでは——ほんの少しだけ思っているが——ない。

今日も満員の地下鉄で、サラリーマンに囲まれた状態で陽菜は痴漢に遭っていた。スカートの中に入った手がショーツの上から尻を撫でている。陽菜は今日はいつもより大胆だな、と思いつつ、うっかり蜜壺を濡らしてしまっていた。何せ毎日こ

ういうことを妄想しながら自慰をしているから。

「ハアハア……」

「……………」

「本物はかわいいなあ……」

耳元でねっとりつつぶやかれて、陽菜はぴくりと反応した。

(……？ 本物って——？)

「はあ、ひなちゃん、ずっとこうしたかったよ」

「っ！」

びくり、と陽菜が反応すると、ずっと尻を撫でていた手がスカートから抜けて、がばりと陽菜を後ろから抱きしめた。

思わず叫ぼうとした陽菜だが、こんなことは初めてされたからか、恐怖で声が出ない。前に回った手は陽菜のふくよかな胸をいやらしく揉んでおり、尻には固い物がこすりつけられた。

(な、なに、こわい、なんで名前——)

「ひなちゃんのGカップおっぱい、揉み心地最高だね……早くピンク乳首も見たいな」

「あ……………」

たましい指が器用に胸元のボタンを外していくのを見て、陽菜は抵抗しようとしたが、後ろから抱き着かれている上に乗車率百二十パーセントの満員電車のため、身動きが取れない。陽菜にはやめてくださいとか助けてくださいとか言う勇気はなかった。

(な、なんで名前と胸のサイズを……そんなの知ってる人なんて……ま、まさか)

「ハアハア、今日は水色のブラジャーなんだね。かわいいな。でも僕が見たいのは乳首なんだ……」

「あっ……！」

ボタンを開いて現れたブラジャーの縁に指を引っ掛けられ、さらにそれを勢いよくおろされた。ぶるんっと身体に見合わぬ大きな乳房が零れて、その手は慌てて乳房を下から救うように持った。

「ああ、ひなちゃんの本物のおっぱいだ、本物の——ああ、本当に乳首がピンクだなんて——」

「っ」

乳首をぎゅ♡ と摘まれて、陽菜は思わず身体を震わせた。

「はあ、ひなちゃんの乳首摘まんじやった——。ひなちゃんの乳首、ひなちゃんの乳首、ひなちゃんの乳首っ……」

「っ、あ……っ」

声が漏れてしまい、陽菜ははっとして両手で自分の口を塞いだ。後ろから伸びてきている手は、陽菜のピンク色の突起を指の腹で擦ったり、弾いたり、親指と人差し指で挟んだり——とにかく責めてくる。

自分ではよくやってるとは言えど、陽菜は他人から、しかも見知らぬ、おそらく自分の父親かそれ以上の年齢の人に、周りに人がたくさんいる地下鉄で乳首を虐められてしまい、普通なら恐怖が勝るはずだ。しかしただ「こういう妄想をよくしていた」という一点で、陽菜は普段の自慰より激しい快感を得てしまい、抵抗するのをより難しくさせていた。

「かわいいピンク乳首、コリコリに勃起しちゃったね」

「う……」

「ピンクの乳輪もぷっくりしてておいしそうだよ」

「……ふ」

「ひなちゃん、チクニー大好きなんだよね。本当は乳首べろべろ舐めたりじゅぽじゅぽ吸ったりしたいんだけど、それは後でね」

陽菜はぼろりと涙をこぼした。

それが恐怖によるものなのか、快感によるものなのか——それは陽菜の顔を見れば、すぐわかることだ。

乳首を弄っていた右手が外れ、その手は腹を伝って足の付け根の位置に来る。その手がスカートの前面を引き上げてウエストに押し込み落ちないようにすると、次はショーツを撫でる。

「ハアハア、ひなちゃんのおまんこ、ひなちゃんのおまんこだあ……♡」

「……っ」

「ずっとひなちゃんのおまんこにちんぽじゅぽじゅぽしたかったんだよ……♡ やっと、やっどここまでこれたんだ」

「ふ、あ……」

ショーツの上から割れ目を撫でられて、陽菜は思わず声を漏

らした。それは怯えや驚きから来たものではなく、甘いものだった。小さな声だったが陽菜の小さな耳を舐めんばかりにぴったりと密着している男にははっきりと聞こえたらしく、陽菜の耳にねばついた息遣いがさらに強く届いて来る。

「ひなちゃんのえっちな声、かわいいねえ。おじさん興奮してきちゃうよ」

「や……」

「パンツも湿ってきてるね。おまんこぬるぬるになっちゃってるのかなあ」

「あっ」

ショーツの上から撫でていた手は一旦外れ、ショーツの上から侵入する。薄い陰毛を愉しむように撫でた後、その指先は濡れそぼっている蜜口に到達した。

「ハア、ハア、ひなちゃん、おまんこぬるぬるだねえ……」

「ん……っ」

「本当におまんこ準備してくれてたんだ……」

「ふっ、う……っ」

太い中指が割れ目をスライドするように往復し、指は段々深い所に埋まっていく。深度が増せば増すほど指にまとわりつく愛液は増え、簡単に深い所に進んでいった。

……っ、ふうっ♡

「んん……っ！」

「おじさんの太い指、簡単に入っちゃったよ……♡」

「あ……あ……」

「ひなちゃんの処女おまんこ、熱いねえ。おじさんの指やけどしちゃうかも」

「んっ……」

「おまんこのえっちなお汁もいっぱい、おじさんの指ふやけちゃうね」

「……っふ、」

「気持ちいいかな？もう少し指奥まで入れるね」

「っ！」

第一関節までしか入っていなかった指は、ぬるり、とやはり簡単に第二関節まで埋まってしまった。

自分の細い指しか入れたことのなかった陽菜は、こんなに太い物が入ってきたのは初めてで、自分の胸を揉んでいる男の片腕に縋りつくように抱き着いてしまった。

「ああ、ひなちゃん、ひなちゃん、そんなに気持ちいいのかな、おじさんたまらなくなっちゃうよっ……」

「う、んっ……」

「大丈夫だよ、おじさんがちゃあんと気持ちよくしてあげるからね。……ほら、二本目も入れるから」

「っっ！」

今度は中指が入ったまま、穴を広げるように一気に薬指も入ってきた。初めての感覚に陽菜が足をふらつかせるが、後ろからがっちり男に抱きすくめられている為、倒れることはない。

それどころか、男はその指でピストン運動を始めた。動きはまだゆっくりだが、指が抜けるほど浅い所から、指全体が埋まるまでを一気に差し込むので、陽菜はもうかろうじて我慢していた声を漏らし始めてしまう。

ヌップ……♡ ヌップ……♡ ヌップ……♡

「あ、あっ……！」

「どうだい、ひなちゃん。おじさんの手大きいから、手マンでも気持ちいいだろう？」

「ひ、んんっ」

「でも、ちんぽの方がもっと気持ちいいから。早く挿れてあげたいな」

「んあっ♡」

それを言われた瞬間、陽菜はぎゅっと膣を締めた。もちろん無意識だ。

陽菜はずっとソレが欲しいと思っていた。ただ、いくら裏垢で言っている、本当は恋人を作って、素敵な初夜を迎えたい、というのが本音のはずだった。痴漢や強姦で親子以上に年の離れた人を受け入れるだなんて、絶対嫌だと。

しかしどうだ。自分は今、自分でやる時よりうんと感じている。はっきり言って、もう嫌だなんてかけらも思っていない。

ただただ、指でこんなに気持ちいいなら、ソレはどんなにすごいのかと、頭の中はそれだけになってしまっていた。

……ヌコッ♡ ヌコヌコヌコッ♡ ……ヌッチ♡ ……ヌッチ♡
……ヌッチ♡ コリコリコリコリッ♡

「ん、ん、んんっ♡」

「ひなちゃん、おまんこすぐきゅんきゅんしてるよ♡ ほら、
奥擦るとこんなにきゅんきゅんする♡」

「んんっ♡ ん～～っ♡」

「はあ、はあ、声出してもいいんだよ。かわいい声聞かせてよ」

「あ、ふ、でもっ……♡」

「大丈夫大丈夫、周りにいるのみんなひなちゃんのフォロワー
だから♡」

「え……？ あ、きゃあっ！」

陽菜が快楽に支配され始めているぼんやりとした頭で視線を
あげると、周りの自分に背を向けていたはずのサラリーマンた
ちが皆自分を見下ろしていて、陽菜は思わず小さく悲鳴を上げ
て腕で胸を隠した。

「ハアハア、ひなちゃん、ずっと見てたよ♡」

「おっばい本当におっきいんだね♡」

「おまんこのくちゅくちゅ音聞こえてたよ♡」

「こんな可愛いのにこんなえっちじゃだめじゃないか♡」

「や、やあっ……！」

周りの男たちが一斉にしゃべり始め、その目は血走って陽菜を舐めるように見ていたものだから、陽菜は怯えて後ろに下がろうとしたが、がっちりと背中には抑えられているのでこれ以上下がれない。それよりなにより、陽菜はこの状況に興奮してもいた。

後ろの男はいつの間にか準備をしていたようで、スラックスからはいきりたった肉棒が出て上を向いており、後ろに引こうとする陽菜の柔尻をぐりぐりと押す。

「ひなちゃん、おまんこぎゅんぎゅんに締めてくるよ♡ そうだ、みんなにもおまんこ見てもらおっか♡」

「あ、ああっ！」

後ろの男の指が膣から抜け、どぷり、とせき止められていた愛液がショーツにこぼれる。そして男は陽菜のショーツを膝まで下すと膝裏に手を入れて足を抱え上げ、陽菜の足が宙に浮い

た。手前に入れた誰かの手が陽菜のショーツを抜くと、膝裏を抱えていた手が両側に開く。陽菜は空中でノーパンでM字開脚を披露してしまった。

「あ、あ、だめ、だめえっ……！」

「ああ、ひなちゃんの生おまんこだっ……！」

「十分画面越しに見てきたけど、本物はすごいな……」

「マン汁でてらてら光ってるよ♡」

「チンポぶちこみてえ♡」

陽菜は必死で手を伸ばして女性器を隠そうとするが、両側の男に腕を掴まれてしまい、身体の自由が完全になくなってしまった。

「ひなちゃん、ほら、みんながひなちゃんのおまんこ見てるよ♡」

「だめ、や、見ないでえっ……」

「おマンコすごくひくひくしてる♡チンポ欲しいんだなあ♡」

「ほしがりおマンコにはお仕置きが必要じゃないかな♡」

「あ、あう、おしおき……？」

「そうだよ♡ 16歳でこんなえっちすぎるおまんこはお仕置きしなきゃね♡」

「あ……あ……」

陽菜はもう、心も身体も限界だった。これ以上我慢するのは到底無理だ。それを知っているのか、陽菜を抱える男は陽菜の耳に口をくっつけて犯すように声を放つ。

「オジサンのおっきなおちんぼで、ひなちゃんのすけべなおまんこ、泣いて嫌がってもいーっぱいじゅぽじゅぽしておしおきするからね♡」

「おじさんの、おっきなおちんぼで……」

「うん♡ おじさんのおっきなおちんぼで♡」

「わ、私……私……」

「ちゃんとおねだりできるかな？」

ごくり、と陽菜は唾を飲み込んで、自分を抱える人の顔が見えるくらいに顔を傾けて、上目遣いになった。

裏垢なんてものを作っていなければ決してこんなことにはならなかっただろう。普通に生きていれば身につかない語彙を使

って、陽菜は正しく、おねだりをした。

「ひ、ひなの……」

「うん」

「ひなのほしがりおまんこ、おじさんのおつきなちんぽでいっぱいおしおきして……♡」





んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

